

北の人々とのつながりを示す洞窟陰刻画

15

てみや どうくつ

手宮洞窟



- 所在地：小樽市手宮1丁目3番4号/手宮洞窟保存館
- 問合せ先：小樽市総合博物館（TEL 0134-33-2523／見学には入館料が必要です）
- 休館日：毎週火曜日（祝日の場合は翌平日）、年末年始、臨時休館あり

幕末、小樽港北端にある露頭に石材を探しに来た石工が、洞窟内の壁面に奇妙な模様が刻まれているのを発見しました。この陰刻画は榎本武揚によって学界に紹介されたこともあり、数多くの研究者、来訪者が見学に訪れ、「考古学」が紹介されたばかりの当時の日本において、一躍話題の遺跡となりました。

現在洞窟内に確認できるモチーフは34個で、多くは「Y」字型が繰り返し刻まれています。これらの彫刻は一度に刻まれたものではなく、また、決まった法則で順次掘られたものでもないことが調査により明らかにされています。

このような陰刻画が残された洞窟遺跡は、国内では手宮洞窟とフゴッペ洞窟（余市町：国指定史跡）の他に例がなく、ともに続縄文時代後期（約1,600

年前）のものとみられています。

周辺諸国に目を向けると、アムール川流域やバイカル湖周辺などの岩壁画と類似していることが分かっています。アムール川流域では、かつて狩りの成功を祈願し岩壁に人物像を描く風習があったことから、手宮洞窟の陰刻画も同様の目的で刻まれたとも考えられます。当時の人々が日本海を挟んだ東北アジアと交流していたことをうかがわせます。

手宮洞窟は大正時代から有志による保存が図られたほか、そのモチーフを使用した菓子が開発・販売されるなど、国内の遺跡の中でも、地域全体で「保存と活用」が図られた最も古い例のひとつと言えます。手宮洞窟は、現在「手宮洞窟保存館」として公開・保護されています。



【写真】1 手宮洞窟保存館 2 陰刻画 3 陰刻画図面 4 昭和初期の手宮洞窟（小樽市総合博物館所蔵）